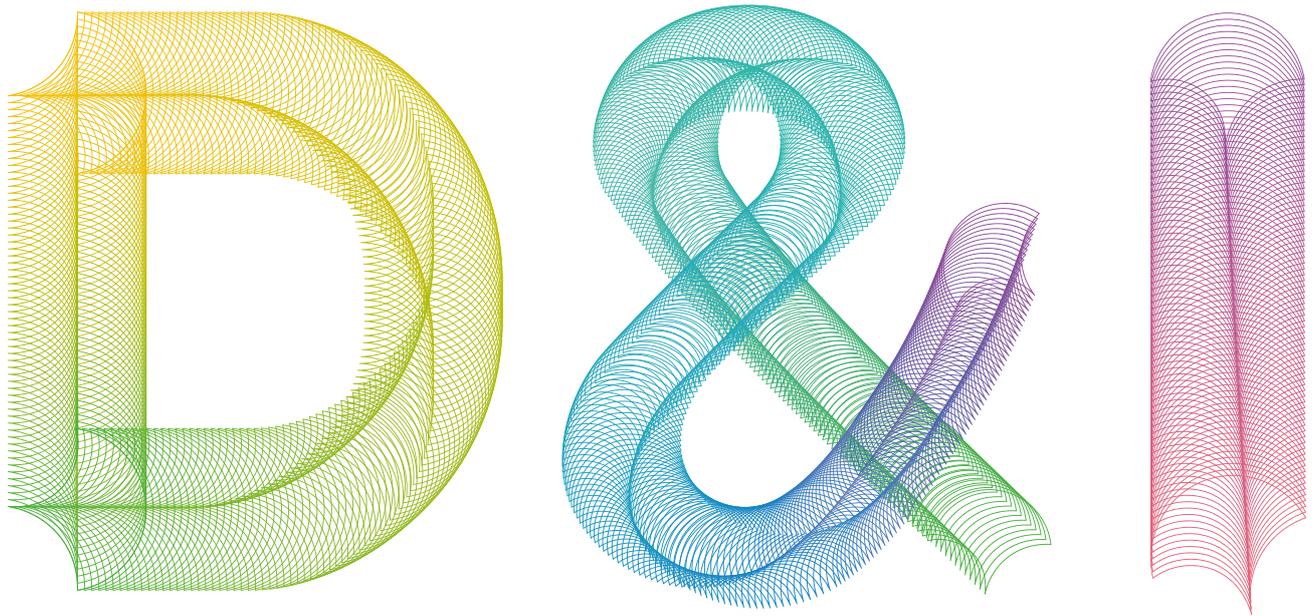


学内広報

2022.3.25

no.1556



UTokyo Diversity & Inclusion



志ある卓越。  東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

国際女性デー記念 東大×朝日シンポジウム録
「インクルーシブな未来へ」

長年お疲れ様でした
令和3年度退職教員アルバム

国際女性デー(3月8日)記念シンポジウム

インクルーシブな未来へ

研究者、学生、ジャーナリスト、企業役員がD&Iをお題にディスカッション



東大も朝日も女性比率は2割

伊木 東大の学部学生と朝日新聞社員の女性比率は、どちらも2割弱です。

八尾 居心地の悪さを感じることは多々あります。授業でグループワークをする時女子が一人になり、自分の発言がまるで女性代表のものであるように捉えられがちで、発言のしづらさを感じます。本来よい意見が出たはずの機会が奪われるのは、組織にとってもよくありません。

大杉 私が入学した約30年前に女子学生が初めて1割を超えたと言ったのですが、当時の自分と同じことをいまの学生も感じていると聞いて残念です。1割や2割では変わらず、もっと増やさないといいけません。もちろん教員もそうです。

伊木 数を増やす話になると、下駄を履かせるのか、優遇は逆差別だ、と声が上がります。研究の世界でも同じですか。

大杉 はい。たとえば女性研究者限定の公募に対して男女両方から異論が出ます。女だから採用されたと思われるのは悔しいという声もあります。院生やポストクの頃、セクハラまがいのことは何度もあり、男性なら悩まないでいいことで悩まされてきました。女性限定の公募があっても、女性ゆえに乗り越えないといけなかったハードルはチャラにはならないでしょう。女性優遇で利益を受けても自分の能力を疑ってほしくないと思います。

林(尚) 私の職場では、紙面の責任を

負う幹部の約3割が女性になり、現場が変わりつつあります。ある繊維会社が長年続いてきた女性の着水キャンペーンをやめました。それを大きく取り上げることで、男性記者陣が記事を書いたんですが、女性デスクの指摘で原稿の位置付けをめぐる議論が巻き起こりました。多様性の時代だからやめたという記事から、性の商品化の側面があるのではないかという問題提起の記事に変わったんです。意思決定やものを生み出す場に女性が複数いる意味を身に沁みて感じます。

伊木 将来の選択肢を狭める要因があるとするとうどんなことだと思いますか。

八尾 最も深刻な問題の一つは、無意識のうちに選択肢を狭める刷り込みです。女子だから無理して東大に行かなくていいとか地元に残ればいいとか。学校、家庭、メディアでバイアスが形成され、当事者のなかで内面化されます。ありえた可能性が潰れるのはもったいないです。

伊木 D&Iの課題を企業としてはどう分析しどんな取り組みをしていますか。

4:4:2の「パネルプロミス」

宮丸 2つ話題を共有します。一つは2020年から始めた「パネルプロミス」で、イベントなどの登壇者を男性40%:女性40%:多様性推進枠20%とするものです。多様性を可視化し、無意識のバイアスを軽減するのが目的です。単なる割合合わせではなく、多様性によって新たな

観点や気づきを生み出すことが重要です。もう一つはDとIの間にEquityを挟んだ「DEIフレームワーク」です。個人の違いを考慮せず全員に「平等」なものを提供するか、個人の違いを考慮して「公平」な機会を提供するか。後者を模索し、最終的には「平等」で「公平」な機会が全員に提供される世界へ、という考えです。

伊木 少数派になりやすいのは女性だけではありません。橋本さんは自閉症スペクトラムの発達特性があるそうですね。

橋本 私が通った中学校では、発達特性がある生徒の数がクリティカルマスを超えていました。自閉症スペクトラムの特性を持つ生徒同士が連帯してコミュニティが形成され、特性を持つ人の発言力が高まりました。それにより、教師も含めて出る杭を尊重する空気が学校全体でできていたんです。マイノリティが一定数を超えて連帯が進むと発言力が高まり、コミュニティ全体がインクルーシブになる可能性がある、と伝えたいです。

綾屋 第二部のマイクロアグレッションの話で引用したスーという学者は、多数派が持つのはリアリティを定義する力だと指摘しています。数の力はリアリティの力だと肝に命ずる必要があります。

大杉 先日、目の見えない人が世界をどう感じているかを書いた本を読み、衝撃を受けました。晴眼者にはできない発想がありました。見え方が違う人同士が対話することで、わからなかったことがわ

※上記は抄録です。言葉は省略されている場合があります。

3月2日、東京大学は「ダイバーシティ&インクルージョン」をテーマとするシンポジウムを朝日新聞社と共催しました。総長と朝日新聞社社長のほか、ジェンダーやD&Iに向き合う研究者、教員、学生、企業役員、ジャーナリストが登場。インクルーシブ社会の実現に向けて、大学やメディアや企業がどのような役割を果たすのか、実現した先にはどのような風景が見えるのか、議論を深めました。第三部で行われたパネルディスカッションの様相を要約して紹介します。

※当日の様子は「東大TV」で視聴できます。https://today.tv/contents-list/2021FY/womens_day



●プログラム (朝日新聞社読者ホールよりLIVE配信)

第一部 対談「ジェンダー平等の実現へ 東京大学と朝日新聞の取り組み」／藤井輝夫、中村史郎 モデレーター：林香里

第二部 プレゼンテーション「キャンパスから考えるD&I」／綾屋紗月

第三部 パネルディスカッション「インクルーシブな未来へ」／綾屋紗月、大杉美穂、橋本恵一、林尚行、宮丸正人、八尾佳凜
ファシリテーター：伊木緑



かったり、世界や発想力が広がったりする。それは研究の世界ですごく重要なことです。知識だけでなく独自の発想を生むことが非常に大事。多様な見方をする人がいて、対話があって情報を交換できれば研究にとって非常によいことです。

林(尚) 新聞社ではたくさんある部ごとの帰属意識が強く、均質的なシステムを長く守ってきました。これを壊して長期的ビジョンを明確化することが必要です。

伊木 東大の男女比率が半々になると社会にはどんなインパクトがあるでしょう。

東大の歪みは社会の歪み

八尾 東大は産業界、学术界、官公庁にも人材を輩出しています。東大の歪みは社会の歪み。D&Iの考え方を持つ卒業生が社会に出ることが重要です。少数派が周縁化される負の連鎖を断ち切ることに教育機関として貢献できるはずです。

伊木 最後にお題です。インクルーシブ社会に近づくため明日から何をしますか。

綾屋 私の研究室には様々なマイノリティに属する人がいますが、各々が属するコミュニティの背景や、何を言われたらマイクロアグレッションと感じるかについてはあまり話題にしたことがありません。身近な同僚とその点を話す場を設け、キャンパスを多様性に開く学生・教職員向けプログラム開発に取り組みます。

大杉 私を含め、多数派ゆえの特権があることに鈍感になりがち。本来は多数派

が学ぶ努力をすべきですが、少数派が声を上げたときに、多数派はせめて声を上げた人を一人にしないことが大事です。その点を心がけようと思います。

橋本 マジョリティ側の男子学生の一人として避けたいのは、マイクロアグレッションの加害者になることです。そうならないためには当事者コミュニティの声を聞くのが一番で、東大で声を聞きやすいメディアが『biscUiT』*でしょう。よく読んで女性の困りごとを学びます。

林(尚) 縦の壁と横の壁を壊す行動を行います。前者では読者が信頼してくれる記事を出すために、あるときは上司が女性で部下が男性、あるときはその逆というふうには縦の行き来ができるチームを作ります。後者では、部を越えたチームを作って信頼できる記事を生み出します。

宮丸 将来のインクルーシブ社会に向けて、新しい活動やアプローチを生み出さないといけません。より多様な皆さんとともにインクルーシブな社会に向けた価値創造の一つずつ取り組みます。

八尾 学生の特権かもしれませんが、違和感を感じたときに声を上げることです。就職活動をする中でも、少しでもおかしいと感じることがあった際にはためらわず声をあげることを実践します。

伊木 私は、他人の考えがわからないのが大前提だと肝に銘じ、理解し合うために言葉を尽くそうとあらためて思いました。本日はありがとうございました。

大学とメディアのトップが対談

第一部では、「ダイバーシティとはほど遠い」と林理事が紹介した両組織のトップが対談。中村社長は、2016年に日本のジェンダーギャップ指数が144国中111位だった衝撃を機に取り組みを重ねてきたことが2020年の「ジェンダー平等宣言」に結実したこと、女性指導者育成の専門家を社長アドバイザーに招くことなどを紹介しました。藤井総長は、多様な人々による対話は学術の高みを目指す上でも重要なこと、D&I宣言の準備を進めていること、女性人事加速の5カ年計画を始めたことなどを紹介。女性支援の施策を行うと「下駄を履かせるのか」と言われると悩みを吐露した林理事に、「下駄を履いていたのは男性」と中村社長が応じ、藤井総長が深く頷く一コマも。

第二部では、外から見えにくい経験を内側から記述してメカニズムを探る当事者研究に取り組む綾屋先生が登場。人間についての研究には当事者が主体的に関わる共同創造が必要だということが国際的に共有されていること、障害は個人と環境のギャップに起因するという障害の社会モデル、ふとした言動で相手を傷つけるマイクロアグレッションなどを説明しました。先端研では障害のある研究者を雇用するユーザーリサーチャー制度を日本で初めて導入し、現在5人の研究者が活躍中との報告も。インクルーシブなキャンパスの一端を覗かせるようなプレゼンテーションでした。

*八尾さんが代表を務めた「東大女子が贈るフリーペーパー」https://utbiscuit.xxxx.jp

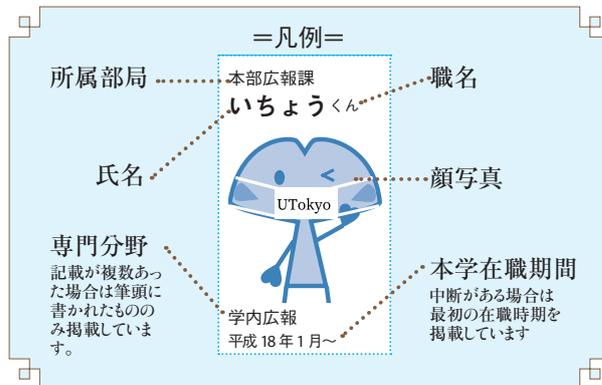


令和3年度 退職教員アルバム

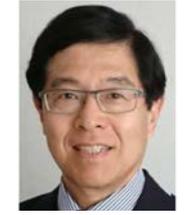
お疲れ様でした & ありがとうございます!

例年、年度末に退職する教員情報について東大ポータルで提供を呼びかけ、所属部局から提出があった紹介情報をウェブ上に掲載してきました。昨年度から引き続き今年度も長引くコロナ禍の影響で顔を合わせる形の送別の宴などの開催が難しくなり、最終講義もオンラインでの開催が多くなっているという現状に鑑み、「学内広報」誌面にも皆さんのお名前と写真を掲載し、先生方の大学へのご貢献を労います。長年にわたる東大での研究・教育活動、大変お疲れ様でした。

先生方の詳しい情報は
こちらから



<p>法学政治学研究科 藤原 帰一 教授</p>  <p>国際政治学 昭和 59 年 4 月～</p>	<p>医学系研究科 河西 春郎 教授</p>  <p>生理学 平成 2 年 6 月～</p>	<p>医学系研究科 川上 憲人 教授</p>  <p>精神保健学 昭和 60 年 4 月～</p>	<p>医学系研究科 小林 廉毅 教授</p>  <p>公衆衛生学 平成 10 年 9 月～</p>	<p>医学系研究科 真田 弘美 教授</p>  <p>老年看護学 平成 15 年 6 月～</p>	<p>医学系研究科 鈴木 洋史 教授</p>  <p>医療薬学 昭和 63 年 1 月～</p>
<p>医学系研究科 島山 昌則 教授</p>  <p>感染腫瘍学 平成 21 年 7 月～</p>	<p>医学系研究科 宮崎 徹 教授</p>  <p>分子病態医科学 平成 18 年 4 月～</p>	<p>医学系研究科 宮園 浩平 教授</p>  <p>分子腫瘍学 昭和 63 年 7 月～</p>	<p>医学系研究科 森屋 恭爾 教授</p>  <p>肝臓病学 平成 3 年 6 月～</p>	<p>工学系研究科 相田 卓三 教授</p>  <p>高分子化学 昭和 59 年 4 月～</p>	<p>工学系研究科 縄田 和満 教授</p>  <p>統計学 平成元年 4 月～</p>
<p>工学系研究科 藤田 昌宏 教授</p>  <p>設計自動化 平成 12 年 3 月～</p>	<p>工学系研究科 古米 弘明 教授</p>  <p>都市雨水管理 平成 9 年 2 月～</p>	<p>工学系研究科 堀 浩一 教授</p>  <p>人工知能 昭和 63 年 4 月～</p>	<p>工学系研究科 光石 衛 教授</p>  <p>機械工学 昭和 61 年 4 月～</p>	<p>工学系研究科 山口 彰 教授</p>  <p>原子炉工学 平成 27 年 1 月～</p>	<p>工学系研究科 横山 明彦 教授</p>  <p>電力システム工学 昭和 59 年 4 月～</p>

<p>人文社会系研究科 佐藤健二 教授</p>  <p>歴史社会学 昭和 58 年 4 月～</p>	<p>人文社会系研究科 佐藤宏之 教授</p>  <p>先史考古学 平成 9 年 4 月～</p>	<p>人文社会系研究科 高山 博 教授</p>  <p>西洋史学 平成 5 年 4 月～</p>	<p>人文社会系研究科 横澤一彦 教授</p>  <p>認知心理学 平成 10 年 10 月～</p>	<p>理学系研究科 下浦 享 教授</p>  <p>実験核物理 昭和 63 年 4 月～</p>	<p>理学系研究科 長谷川哲也 教授</p>  <p>固体化学 昭和 61 年 9 月～</p>
<p>理学系研究科 日比谷紀之 教授</p>  <p>海洋物理学 昭和 62 年 4 月～</p>	<p>農学生命科学研究科 岡田謙介 教授</p>  <p>熱帯作物栽培生理学 平成 22 年 4 月～</p>	<p>農学生命科学研究科 岡本 研 准教授</p>  <p>水域保全学 昭和 58 年 5 月～</p>	<p>農学生命科学研究科 佐藤隆一郎 教授</p>  <p>食品科学 平成 11 年 8 月～</p>	<p>農学生命科学研究科 竹村彰夫 教授</p>  <p>粘・接着の科学 昭和 60 年 10 月～</p>	<p>経済学研究科 小野塚知二 教授</p>  <p>西洋経済史 昭和 62 年 4 月～</p>
<p>総合文化研究科 金子邦彦 教授</p>  <p>非線形物理 昭和 60 年 4 月～</p>	<p>総合文化研究科 清水 明 教授</p>  <p>量子物理学 平成 4 年 4 月～</p>	<p>総合文化研究科 中澤恒子 教授</p>  <p>言語学 平成 9 年 4 月～</p>	<p>総合文化研究科 松原 宏 教授</p>  <p>経済地理学 平成 9 年 4 月～</p>	<p>総合文化研究科 村田 滋 教授</p>  <p>有機光化学 平成 8 年 4 月～</p>	<p>総合文化研究科 楊 凱榮 教授</p>  <p>中国語学 平成 7 年 4 月～</p>
<p>数理学研究科 金井雅彦 教授</p>  <p>幾何学 平成 23 年 4 月～</p>	<p>数理学研究科 時弘哲治 教授</p>  <p>応用数学 昭和 58 年 4 月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 木村 薫 教授</p>  <p>材料物性学 昭和 59 年 10 月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 佐々木 健 教授</p>  <p>メカトロニクス 昭和 60 年 7 月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 保坂 寛 教授</p>  <p>機械振動学 平成 9 年 4 月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 山本一夫 教授</p>  <p>糖鎖生物学 昭和 61 年 8 月～</p>
<p>情報理工学系研究科 萩谷昌己 教授</p>  <p>情報科学 平成 4 年 4 月～</p>	<p>情報学環 水越 伸 教授</p>  <p>メディア論 1989 年 4 月～</p>	<p>医科学研究所 北村俊雄 教授</p>  <p>血液学 平成 8 年 9 月～</p>	<p>東洋文化研究所 池本幸生 教授</p>  <p>アジア経済論 平成 10 年 4 月～</p>	<p>史料編纂所 保谷 徹 教授</p>  <p>幕末維新史 昭和 62 年 4 月～</p>	<p>定量生命科学研究所 堀越正美 准教授</p>  <p>分子生物構造学 平成 4 年 5 月～</p>

教養教育の現場から

第50回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

お茶インクとマグロのPCRから科学の目を養う

／全学自由研究ゼミナール「自然科学サロン」

自然科学教育高度化
部門 特任准教授

鹿島 勲



——オムニバス形式の「茶わんの湯」と集中実習形式の「それ何マグロ？」の前に紹介してもらいましたね*。

「この授業はそれらと合わせた「鯨三部分」の一つで、身近で簡単な実験とトークから物事の本質を見抜く科学の目をゆったりと養おうというものです。端的に言えば刺身と割り箸でPCRを体験する授業です。コロナ禍でも注目されたように、少しの匙加減で結果が変わるのがPCR。その難しさを学生が体感します」

お茶で微量液体操作の練習を

——でもまずやったのはお茶の実験？

「お茶インクというものを作りました。粉末茶を水に溶かすだけでは緑色ですが、鉄を加えると茶色や黒色に変化します。使い捨てカイロの中身やスチールウール、緑茶と抹茶の粉末を使いました。鉄を増やしたり時間を長くかけるとより黒くなり、緑茶よりは抹茶のほうが濃い黒になります。学生たちは好きな色のお茶インクを作り、割り箸で好きな絵を描きました。紫外線ランプを当てると色味が変わって見えることも体験しました」

「一方で、関連する問いを配って話すことを続けました。お茶にスチールウールを入れるとなぜ黒くなるのか、化学反応

として似ているブルーブラックインクとお歯黒の相違点は何か、植物はなぜ緑なのか、紫外線を当てるとなぜ赤く見えるのか……。実験の訓練として、微量な液体を扱うピペットマンの使い方も学びます。PCR用の溶液は高価ですが、お茶は安価。しかも適度に粘性があり目に見えるので練習に最適です。生命科学で頻出する1ul~1mlのスケール感を会得するのにも有効。手元が震えるときは片方の手を添えるといった基本も学べます」

納豆とイカと漢方の話もヒントに

——ゲストの特別講義もありましたね。

「納豆の専門家である農業・食品産業技術総合研究機構の木村啓太郎先生は、バクテリアに感染するファージが発生して納豆菌を弱らせる仕組みを解説しました。ファージ研究は古典的ですが、最近また生物学の最前線で注目されています。大気海洋研究所の吉澤晋先生は、スーパーで買ったイカを放置し、体内の蛍光微生物を増やして発光させるお話。再現実験をしたら私も失敗しましたが、おかげでその理由を考えさせることができました。北里大学東洋医学総合研究所の星野卓之先生のお話は鯨と東洋医学。西洋医学にも精通するお立場から、WHOも認めた

漢方の世界について話してくれました」

——そしてついにPCR実験に突入、と。

「抽出、精製、増殖、切断、電気泳動確認と続く工程のなかでは抽出と精製が特に大変で時間もかかります。それを省く方法を考えるうちに見つけたのが「903カード」でした。WHOがエボラ検査に使っているサンプル保存紙で、爪楊枝で体液を紙につけるだけ。切片を潰したり水につけたりと工夫しながらマグロの血を学生たちが採取しました。実は体液を含むPCRは高難度で、過去の「それ何マグロ？」の授業でも失敗続きでしたが、今回は成功例が出ました。サンプルを取り過ぎないことが肝だったようです」

「最後にグループごとに発表を行いました。イカの発光、納豆の新分類、鯨にまつわる植物、蛍光の違い、ファージセラピーなど、授業で触れたテーマから自由に選んで報告する形でした。当初グループ分けを私がやろうとしたら、学生が自分たちでやりたいと言うのでそうしました。重視してきた自発性を体現してくれて嬉しかったです。近年は履修者の幅が広がり、生き物を使う実験に難色を示す学生も出てきました。次回はマグロのかわりにバナナを使ってやるつもりです」



①②③お茶インクと学生のお茶インク作品。④紫外線を当てた緑茶と抹茶。⑤イカの発光実験では72時間放置で悪臭発生。その防止策も議論の題材に。⑥ゲスト講師の星野卓之先生。⑦903カード。⑧マグロの体液を抽出し箸で紙へ (@KOMCEE East教育開発実験室)

*本誌1477号と1538号を参照

あちこちそちこち 東京大学 第31回 本郷・駒場・柏以外の本学を教職員が紹介

保健体育寮

山中寮内藤セミナーハウスの巻

本部学生支援課体育チーム

市村桃子

東大の「山の家」



山中寮近くの山中湖湖畔の景色

東京大学の保健体育寮である山中寮は、富士山麓の山中湖岸の美しく幻想的な風景を楽しむことができ、東京大学の「山の家」と呼ばれています。大正14年に山梨県から土地を借りて学生が開墾し寮が開設され、旧寮は昭和4年竣工以来約80年の歴史がありましたが老朽化が進んでいたため、平成21年に当時のリンナイ株式会社会長の内藤様から寄附金をいただき「山中寮内藤セミナーハウス」として現代建築の意匠が目目を引く素敵な施設として生まれ変わりました。

現在、事業者へ運営を委託しており、館内はカントリースタイルの温かみのあるインテリアで居心地の良い雰囲気を作られており、施設内では、広々としたセミナールームがあり、会議、勉強会、または趣味のクラブなどで利用することも可能です。研究室であればゼミ・演習・学会など、また学生団体であれば合宿・旅行などに利用することができます。

また、山中寮は農学部附属演習林である「富士癒しの森研究所」内にあるため、カラマツ林の散策などもお楽しみいただけます。バス通りを1本はさんで林を抜けるとすぐに山中湖の湖面に出ることが出来ます。山中湖・富士山その他周辺施設・観光名所を楽しむ際のベースキャンプとしても最適な場所にあります。

山中寮は、東京新宿から高速バス1本でアクセスすることができ、東京大学の学生・教職員・卒業生であれば利用することができます。ぜひ、ご家族やご友人とのご旅行でもご利用ください。



1. 山中寮のフロント
2. 周辺の風景
3. 洋室は全8室。教職員は一泊4500円
4. 和室は全11室。教職員は一泊3500円

www.abreuveoir.co.jp/yamanaka/

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第17回

文科一類1年 村上諒

雲伯地域の3城連携による周遊促進

当チームの目標は、端的には、米子市・安来市・松江市に存する3つの城（米子城・月山富田城・松江城）をフックとした雲伯圏域の観光周遊促進策の立案です。

観光消費額が少なく、連泊客数が減少傾向にある当圏域に必要な施策の1つには、圏域の周遊やそれに付随する消費の喚起が挙げられます。3城連携を紹介することで、圏域の食や宿泊のみならず、3城の歴史的な関連や各施設・城下町の構造の相違といった地域に固有かつ多様な要素を巻き込むことが出来ます。

2021年12月に1泊2日で行った現地活動では、3城の観光資源化の方策を現地の諸課題に照らして考察するための重要なヒントを得まし

た。それに立脚し、各城に必要な個別具体策及び周遊促進策の2つの視点から議論を重ねています。

まず、国宝の天守を擁する松江城は、年々来訪者数が減っているため、観光客を繋ぎ止めるためにも、現在不十分な城下町の観光資源化によるリピーター獲得を軸に据え思案中です。

月山富田城は、山城の代名詞的な位置付けであるはずなのですが、登城者数が極めて少ない現状の脱却を、山城ブームの冷めていく今後い

かに実現させていくかが課題です。そこで、城内施設までの案内方法の改善や、山頂まで登らずとも麓や山腹においても城を楽しめる工夫を捻出しています。

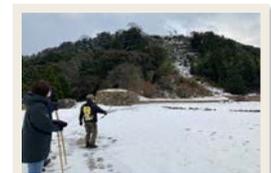
米子城に関しては、観光事業の運営主体がほぼボランティア同然で、持続的な収入確保も課題です。米子の強みである城下町での対人交流に更に宿泊や移住の視点を入れて持続的な消費を喚起する方針で、現地の一般社団法人と新事業を立ち上げようとしています。

このような周遊先である3城各自における取り組みのみならず、周遊を引き出す工夫も必要です。車離れの中で車ありきではない観光を提供するための二次交通や、観光客の足を止める周遊施策のあり方についても議論をしています。

最後になりましたが、このような貴重な学びの場を共創して下さっている全ての方に、一同心より感謝申し上げます。



安来市立歴史資料館にて平原館長によるご説明



月山富田城を踏破

※メンバーはほかに武樋実優（文一2年）、宮部壮貴（文学部3年）、寺園結基（工学系修士2年）、杉浦圭（薬学系修士2年）

ワタシのオシゴト 第190回

RELAY COLUMN

本部入試課
入試企画・広報チーム **吉田美緒**

入試だけじゃありません



オンライン説明会中（ユータスクと）

入試課では学部入試の実施が主な業務です。入試課という「公正・公平」をモットーにする職務上なかなか見えない仕事が多いのですが、チーム名のとおり「入試広報」として各都道府県の説明会に参加するような、表に立つ仕事もしています。

説明会の東大ブースに来る高校生は、大学の概要について聞きたがる人から、興味のある研究に関する具体的な質問を用意してくる人までさまざま。わざわざ足を運んでくれたの質問、できる限り答えたいのですが、想定外の質問がくると担当課を案内するしかないこともあり、経験と知識が浅いのを申し訳なく思うことも……。入試広報期間は、職員も勉強の日々になります。

執筆している現在は梅がやっと咲き始めたころですが、発刊のころには桜も咲くあたりの時期ですね。気兼ねなくぶらぶら美術館を巡り、おいしいお酒がたくさん飲める日々を待ちわびつつ、引き続き東大について学んでいきたい思います！



初詣は美術館で！

得意ワザ：ちょうどよく熟したアボカドを選び出すこと
自分の性格：のんびり
次回執筆者のご指名：西村洋平係長
次回執筆者との関係：入職時お世話になった上司です
次回執筆者の紹介：物腰やわらか

ぶらり 構内ショップの旅

第1回

レストランカメラリア @伊藤国際学術研究センターの巻

ホテル仕込みのフレンチを

今年2月に開店10周年を迎えた、本郷キャンパス伊藤国際学術研究センター1階にある「レストランカメラリア」。大正時代に建てられた赤門書庫の一部が残る趣のある空間で、ホテル椿山荘東京のフレンチレストランで経験を積んだ川口道夫シェフが腕をふるう料理を味わうことができます。コロナ渦の影響で一年ほど休業しましたが、昨年4月から営業を再開しました。

「3月1日に新しくなったコースメニューを、ぜひ多くの人に楽しんでいただきたいです」と話すのは支配人の中島一人さんです。普段は一階の運営室にいますが、レストランにも時々顔を出し、サービスなどを手伝っているそうです。



支配人の中島一人さん

学内構成員の利用が多い昼の人気メニューは、1600円のワンプレートランチです。チキンかポークの2種類から選べるメインディッシュに、スープ、ピクルスやサラダ、そして珈琲もついてきます。乾杯の一杯と共にゆったりと食事を楽しみたい人には、3500円と4500円のコースもあります。昨年4月にはカメラリア初のテイクアウトも始めました。メニューはカレー、ビーフストロガノフ、フリカッセ（鶏の煮込み）の3種類。全てに珈琲がつきます。何時間も煮込んだ3品にはシェフのこだわりが詰まっているそうです。価格を1000円と低めに設定したことで、これまであまり見かけることがなかった学生の利用も増えてきているとか。「約1年経ちましたが、徐々に口コミなどで広まって、リピーターも増えています」

夕方の17時半まで利用できるテイクアウトは、現在はイートインスペースになっている隣接するカフェで食べることができます。今なら、店内で食事をする際に「学内広報を見た」と伝えらると、乾杯スパークリングワインのサービス特典がつきます（テイクアウトは除く。4月30日まで）。この機会にぜひ、クラシカルな雰囲気の中でフレンチを堪能してみませんか？



ランチ ● 11:30～
14:30 (L.O.)
ディナー ● 17:00
～20:00 (L.O.) ※要
予約

レンガ造りの店内には大正期に建てられた書庫の一部が使われています

hotel-chinzanso-tokyo.jp/restaurant/u-tokyo/

インタープリターズ・第175回 バイブル

総合文化研究科 教授 廣野喜幸
科学技術インタープリター養成部門

「だから」考

科学コミュニケーターのみなさん、質問されたとき、「ですから」で答え始めることはありませんか。

祖父はアパートを1軒残してくれた。父は89歳で死ぬまで管理にあっていたが、死の1年ほど前から、請求のしわすれなど、問題が生じるようになった。私が、「管理を委託しているKさんが201号室の契約書を確認したいんだってさ」と問うと、「だから、201号室は契約書なんてないんだよ」と父は無然として言い放つ。ここで、私の思いはアパート管理業務を離れる——親父はこうした「だから」をよく使う。しかし、この「だから」って一体何なんだ？

「だから」の基本は、「前に述べた事柄を受けて、それを理由として順当に起こる内容を導く」(『大辞泉』)場合だろう。「真冬に薄着でいたのか。だから、風邪をひいたんだな」といった用例が思い浮かぶ。父の「だから」には、「前に述べた事柄」が存在しない。この用法ではない。

「そのような望ましくない結果が自分には前もって予測できるものであったことを表す」(『広辞苑』)語義はどうか。1958年、松山恵子さんの歌謡曲「だから言ったじゃないの」がヒットした。「あの男とつきあうと貴女は嫌な目に遭うに違いない。だから、そうならないように予め言っておいたのよ」。将来予測＝理由と忠告＝帰結の関係があるのだから、この語義は先の派生形態なのだろう。嫌な思いを味わった時点で、将来予測＝理由が両者に共有されたため、「前に述べたこと」が省略されたと考えられる。父の「だから」発言では、私とのあいだで共有されている理由など存在しない。これでもない。

理由を父の友人周辺に探ってみると、父のごく親しい友人Nさんから、Nさんの友人Sさんを入居させてくれないかと頼まれ、二つ返事で引き受け、Nの紹介なら契約書みたいな拘り定規なことはせずともよいといい顔をしたといったところらしい。半世紀以上一緒に暮らしているのだから、私もおおよそ知っているのが当然と想定し、「だから」を連発したのではないか。しかし、知識の共有は当然のことではない。自分の知っていることは相手も知っていて当然であり、知らないとしたらそれは相手の怠慢とするある種の傲慢さが、私に違和感を起こさせたのだろう。

科学コミュニケーターのみなさん、質問に「ですから」で答え始めたとき、そうした傲慢さを伴っていませんか。聴衆は敏感です。どうぞご注意ください！

科学技術インタープリター養成プログラム

ききんの き

寄付でつくる東大の未来

第29回

渉外部門 アソシエイト・ディレクター 天尾美花

欲しい未来へ寄付を贈る「寄付月間」

毎年12月に行われている“寄付月間”という取り組みをご存知でしょうか？ 12月はただでさえ師走と呼ばれるほど大忙し。12月にそんな取り組みが？ なんて思われるかもしれませんが。

寄付月間とは「欲しい未来へ、寄付を贈ろう。」を合言葉に毎年12月の1ヶ月間、全国規模で展開される寄付啓発キャンペーンです。寄付月間の始まりはさかのぼること2011年。この年発生した東日本大震災において多くの日本人が寄付をし、社会全体の寄付への関心が高まりました。これを受けて、寄付に関連する活動を行っている主要な民間非営利団体、企業、大学、行政、国際機関が集まり「寄付月間～Giving December～」(毎年12月1日から12月31日まで)を行うことを決定し2015年から寄付月間がスタートしました。

東京大学は寄付月間(Giving December)の趣旨に賛同し、2017年より寄付月間賛同パートナーとして活動しています。1年を振り返る12月に、大学関係者が寄付者への感謝と報告についてあらためて考え、多くの人が「自分が望む未来を寄付によって選択し変えていけること」を知り、行動するきっかけとなるよう、寄付文化の醸成に取り組んでいます。

2021年12月には賛同企画として、東大基金アドバイザーの洪澤健氏がナビゲーターを務める“UTokyo Future TV Vol.3～東大と世界のミライが見える～”を実施しました。宇宙線研究所の梶田隆章教授をゲストに「研究を最大化させる寄付の可能性」を熱く議論し配信しました。

また、東京大学運動会マスコットキャラクターのイチ公は、寄付月間のマスコットアンバサダーとして大活躍。寄付月間公式ラジオにゲスト出演し、日々の活動やスポーツとチャリティの関係性について紹介しました。

寄付月間はグループや個人、誰でも参加できます。

寄付をする、寄付啓発イベントの企画、寄付募集キャンペーンや報告会の実施など、アクションの仕方は無限大！ 部局で、研究室で、仲間で、個人で、次の寄付月間を一緒に盛り上げてみませんか？ ご相談は渉外部門まで。



東京大学基金事務局 (本部渉外活動支援課)
kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles, Notices) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
2月14日	宇宙線研究所	ポーランドとハイパーカミオカンデ実験についての覚書を締結
2月15日	本部広報課	令和3年度・令和元年度退職教員の最終講義3月開催分のお知らせ
2月15日	本部広報課	令和3年度退職教員の紹介
2月21日	生産技術研究所	英文広報誌「UTokyo-IIS Bulletin」Vol.9を公開
2月22日	未来ビジョン研究センター	JST「共創の場形成支援プログラム」研究拠点、昇格プロジェクトに採択
2月24日	本部人事企画課	「令和3年度東京大学卓越研究員(公募型)」9名を決定
2月24日	グローバルリーダー育成プログラム推進室	グローバルリーダー育成プログラムGLP-GEFILの第5回修了式を開催
2月25日	本部渉外活動支援課	【東京大学基金】研究者インタビュー 山本浩司准教授
2月25日	本部広報課	ロシアによるウクライナ侵攻について(藤井総長メッセージ)
2月28日	本部入試課	令和4年度大学入学者選抜における受験機会の更なる確保について
2月28日	本部入試課	新型コロナウイルス感染症等に罹患した入学志願者の受験機会の確保について
3月1日	大学総合教育研究センター	東大ナビの一部サービス終了について
3月1日	未来ビジョン研究センター	藤井総長がSpringer Nature SDGプログラム長と対談
3月1日	宇宙線研究所	「マルチメッセンジャーで宇宙をさぐる」をオンライン開催
3月3日	大学総合教育研究センター	東京大学フューチャーファカルティプログラム第18期履修証授与式を開催
3月9日	総合文化研究科・教養学部	国際社会科学専攻の馬路智准教授が名古屋大学より「水田賞」を受賞
3月10日	本部総務課	令和4年度入学式ご家族入場の見送りについて
3月10日	本部入試課	令和4年度前期日程試験及び外国学校卒業学生特別選考合格者発表
3月10日	本部入試課	令和4年度学部入試合格者の皆さんへ(手続のご案内)
3月11日	本部渉外活動支援課	ご入学記念キャンペーン2022 東京大学基金へのご寄付でオリジナルグッズ贈呈!

CLOSE UP 総長がSpringer Nature SDGプログラム長と対談(未来ビジョン研究センター)



対談は3月29日開催の「SDGsシンポジウム2022: エネルギーシステムから考える持続可能な開発目標間の関係」に先立って行われました

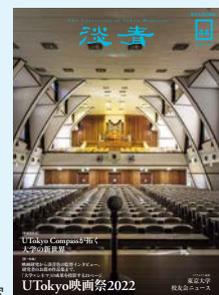
藤井輝夫総長と、シュプリング・ネイチャーのSDGプログラム長であるエド・ガストナー氏が、SDGs達成に向けたそれぞれの組織の取り組みや、多様な人々との協創の重要性について語り合う特別対談を行いました。藤井総長はこの対談の中で、SDGs実現へ向けて東京大学を社会により開かれた大学、すなわち多様な人々が集い、対話し、新たな知を創出する場にしていきたいと話し、また自

身の超学際的な研究事例についても紹介しました。ガストナー氏は、自らの体験をもとに、SDGsは全ての人々がステークホルダー(利害関係者)であるからこそ一致団結が可能だと述べました。今回の対談を通して、社会に幅広くインパクトを与えてSDGsの達成に向けた前進を促すためには、パートナーシップと、超学際的な協力と、包摂性が必要であることがあらためて強調されました。

CLOSE UP 広報誌『淡青』44号を発行(広報室)

広報室が丹精をこめて年に2回発行している広報誌『淡青』の最新号ができました。今号の巻頭を飾るのは、大学の行動指針であるUTokyo Compassについて、総長と理事と執行役が大雪が降るなかで語った座談会。そして特集は「UTokyo映画祭2022」です。カンヌやベルリンでやっているものとは違う、大学ならではの映画祭を目指して用意したのは、卒業生の映画監督と

映画研究者の対談、映画研究者4人による研究紹介、映画人として活躍する卒業生と現役学生の紹介、東大に関する映画トピックス、そして研究者12人が研究者の観点からお薦めする映画作品集、の5企画です。映画と大学の掛け算の成果をご覧ください。3、2、1、アクション! 連載「キャンパス散歩」は盛り上がりを見せつつある柏Ⅱキャンパスです。表紙は駒場900番教室



令和4年度 学内広報 配布スケジュール	1557号	1558号	1559号	1560号	1561号	1562号
	4月28日	5月31日	6月30日	7月29日	8月31日	9月30日
	1563号	1564号	1565号	1566号	1567号	1568号
	10月31日	11月30日	12月26日	1月31日	2月28日	3月31日

※「学内広報」では広告掲載を受け付けていません。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。↓本部広報課（03・5841・2031）



CLOSE UP GLP-GEFIL の第5回修了式を開催 (グローバルリーダー育成プログラム推進室)



GLP-GEFILの詳細はこちら→ <http://www.glp.u-tokyo.ac.jp>

後期課程学部学生を対象とした選抜制のGLP-GEFILプログラムより、第5回目の修了生が誕生しました。修了式は1月28日に伊藤謝恩ホールにて行われました。対面出席できない修了生はZoomでの参加となりました。

48名の修了生が誕生し、GLP-GEFILの修了生は累計で248名となりました。修了生には担当の林香里理事・副学長より総長名での修了証が手渡されました。引き続き、林理事・副学長、大久保達也理事・副学長より、それぞれ式辞・祝辞をいただきました。

当日はハイブリッドにて、本プログラムにご支援をいただいている寄付企業9社より、12名にご参列いただきました。また、東京

大学GLPリーディング・パートナーの住友商事株式会社、サステナビリティ推進部長の大野茂樹様よりご祝辞を頂戴しました。修了生からの答辞は、修了後にアラムナイ役員を務める川瀬翔子さんと山田江理子さん(左写真)が行いました。細心の感染症対策のもと、修了生たちは久々の再会と修了の喜びを交わすことができましたようです。

修了生のほとんどは、コロナウイルスの流行のために、GEFILプログラムの中核である海外プログラムでの渡航ができなかった学年です。パンデミックの中にもしっかりと学び、将来のキャリアに向かって羽ばたいていく修了生達にエールを送りたいと思います。



CLOSE UP 「マルチメッセンジャーで宇宙をさぐる」をオンライン開催 (宇宙線研究所)



ZoomとYouTubeライブでも同時中継され、およそ2週間のアーカイブ配信も含めて約300人の皆様に視聴いただきました

宇宙線研究所は、日本時間の2月12日深夜から、宇宙線研究所の研究者と主にアメリカから参加する研究者がオンライン上で講演・交流する特別シンポジウム「マルチメッセンジャーで宇宙をさぐる」を、一般の参加者も含めてオンラインで開催しました。本イベントはニューヨークオフィス (UTokyoNY) が昨年リニューアルオープンしたことを記念して宇宙線研究所が開催したシンポジウムで、講演や交流は英語で行われました。

シンポジウムでは瀧田正人教授がモデレータを務め、宇宙線研究所の研究者と海外から参加する研究者たちが、それぞれの立場からマルチメッセンジャー (様々な宇宙粒子線) の観測によって宇宙の謎を解き明かす天文学について議論しました。冒頭、イベント責任

者の佐川宏行教授が「ぜひ楽しんで欲しい」と呼びかけたのに続き、UTokyoNYの増山正晴理事長、サイモンズ財団のDavid Spergel代表が来賓として挨拶。続いて梶田隆章所長が基調講演を行い、宇宙線研が取り組む5つのプロジェクトを振り返り、「興味深いマルチメッセンジャー天文学がすでに始まっており、宇宙線研究所はまさにそこで世界に大きく貢献していきたい」と語りました。さらに、チェレンコフ宇宙望遠鏡アレイ(CTA)、テレスコープアレイ実験(TA)、チベット・アルパカ実験、LIGOやKAGRAなどの重力波観測プロジェクトの4分野が取り上げられ、宇宙線研側の研究者とアメリカを拠点に活動する研究者が最新の成果について交互に講演を行い、視聴者からの質疑も受けました。

コロナ禍 vs 東大Now 新型コロナウイルス情報WG発

第16回 対応の司令塔・新型コロナウイルス対策タスクフォース

コロナ禍が世界を覆って2年余り、この間、本学において感染防止と対応の司令塔となってきたのが新型コロナウイルス対策タスクフォース (TF) です。

TFとは大戦時の米海軍の空母機動部隊のことで、転じて特定の用務のための臨時組織を指します。2020年2月28日に、国内感染が急拡大するなか五神真総長 (当時) の判断

で、本学危機管理基本規則第7条に基づく対策本部として設置されました。危機管理担当理事を座長として、感染症をはじめとする医学の専門家を含む20数名からなります。

TFの使命は、「リスクは最小限に、教育・研究活動は最大限に」を念頭に、感染拡大が続く中でも教職員・学生が活動を継続できる安全なキャンパスを構築・維持することです。

そのため、本学の知恵とノウハウを総動員して、感染拡大防止のための統一的な対応方針の策定、感染者発生時の対応、多様な媒体を駆使した情報提供、さらにワクチン接種の実施など、あらゆる課題に対処しています。

入構・活動制限の判断、行事・海外出張の審議など規制・認可も掌り、ときに煙たく思われたかもしれませんが、一人一人の安全と教育・研究との両立という思いは一つです。新年度も、みなさんどうぞご安全に!

(杉山清彦/総合文化研究科・広報室副室長)





自由

卒業後8年間お世話になった東大を離れ、カリフォルニア州パロアルトにあるDNAX分子生物学研究所に留学した。1989年4月のことである。サンフランシスコ空港には長さが10mはある立派なリムジンが迎えに来ていた。走り出したリムジンの遮光窓を通して見た外の景色も半透明で現実感が伴わない。知らない国に来たことを痛感した。パロアルトに到着した私を待っていたのはライトブルーの空と素晴らしい研究環境だった。大学病院の忙しい日常から解放された私は研究に没頭し、2ヶ月後にはアメリカに永住したいと思うようになっていた。

今の日本では自由がますます失われていくように感じる。お互いに見張り合い、非難し合う状況はいいとは思えない。アメリカは自由の国と言われるだけあって人の考え方も自由だ。周りの評価を気にするより、自分が好きなことをする。そして互いに認め合う。そういう大らかな雰囲気がある（勿論、問題も沢山ある）。そんなアメリカでの8年間の生活は、校則のない中高で育った私の自由度を加速したようだ。帰国後も若手と一緒に研究に没頭していた私だが、53歳の時に研究者仲間から誘われ、30年ぶりにロックバンドでドラムを叩き始めた。初めての作詞もした。

レコーディングスタジオで録音してCDを発売したことは予想もしない未来だった。これで勢い付き小説も書き、昨年1月に処女作を上梓した。この歳になって新しいことができるのだから、若い人にはもっともっと多くの可能性があると思う。若い人が楽しく充実した道を進み、閉ざされた街を再び開放してくれることを期待して止まない。

私が20年以上に亘って担当している医科研の近代医科学記念館には多くの小中高校の生徒が見学に来る。彼らは研究や医療に興味があり、皆一様に前向きで将来の夢を持っている。小学校2年生が見学に来た時のことである。見学が終わり子供達の質問を受けていた時、あどけない質問の中で小学生とは思えない質問が出た。「人生で一番大切なものは何ですか?」。虚をつかれた私は「それは自由です」と思わず本音で答えてしまう。そして、この子供達が伸びやかに育ち素晴らしい国を作ってくれる未来を想像できる爽やかな気分になった。その日は東京の空も綺麗なライトブルーだった。

北村俊雄
(医科学研究所)

